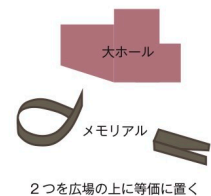




設計の理念と考へ

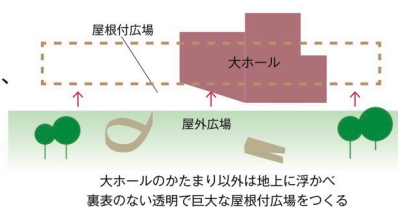
1 | 震災メモリアルと音楽ホールを等価に扱う

中心部震災メモリアル拠点、音楽ホールを訪れるひとたちにも、この場所に立ち寄るすべてのひとたちにもひらかれるよう、ランドスケープと一体的に計画します。互いの存在が静かに響き合う関係をつくるため広場の上に大ホールと等価に配置します



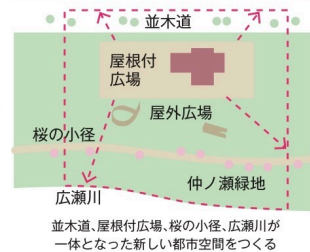
2 | 透明感のある大きなかたまり

諸室を除いた大ホールのかたまりだけを広場に置き、必要な機能空間は上空に浮かべます。グラウンドレベルは広大なランドスケープと連続した屋根付広場となり、全体が大きな透明感のある存在となります



3 | 周辺環境を取り込んだ大きな広場

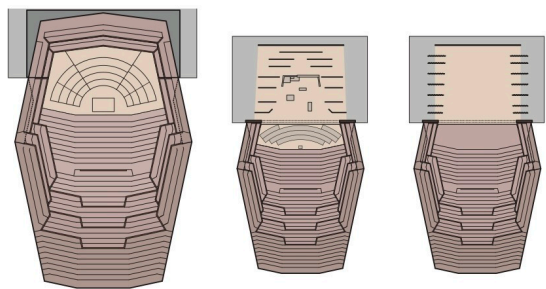
上空に浮かせた南北に長い建物を西側に寄せて配置すると、西側に屋根付広場、東側に大きな屋外広場がうまれます。西側の並木道と東側の桜の小径が一体となり、さらには広瀬川まで連続することで、文化的で自然豊かな都市空間が西公園の対岸に生まれます



設計を進める上で特に留意すること——音楽ホール

多層ワインヤード+サラウンド

■大きくて親密なホール：十数人～数十人単位の客席ブロックが、ステージの全周を複数階から取り囲む「多層ワインヤード+サラウンド型」です。ステージ後方は上部の音響反射板と一体で後ろ舞台に収納し、可動式プロセニウムと組み合わせることで本格的な劇場型への容易な転換ができます。また、公演によってブロックを自由に組み合わせ、適切なレイアウトと客席数で演者と観客の親密さを保ちます



座席構成バリエーション例		座席
BF 一部	オケピット席+中ブロック席	574
BF 全部		921
BF 全部+1F 一部	2F 中央ブロック席	1180
BF 全部+1F 全部		1310
BF オケピット席+中ブロック席+2F フロントサイド席+可動席		876

■アプローチから帰り道まで、ひとつながりの豊かな体験：

ブロックの後方を通路でつなぎくことで明快な動線としつつ、一層目をコンパクトに上層部を充実させることで観客と演者・観客同士を近づけ、公演の一体感を演出します。各層のロビーや広場に面したホワイエは、さまざまな活動に囲まれつつ、青葉山から広瀬川にわたる眺望にも彩られて、公演前後の豊かな体験をつくりあげます

・とけこむホワイエ

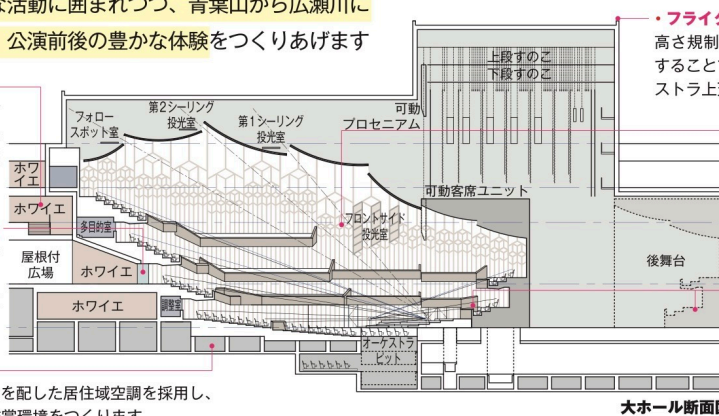
交流ロビー上の吹き抜けを介してトップライトからの自然光に満ち他階の活動のざわめきが響く、明るくにぎやかなホワイエです

・屋根付広場とつながる大ホール

客席後方の壁を2重のガラスを介して外に開くことで、1階のコンパクトなホワイエごしに、大ホールをのぞくことができます

・ここちよい客席

客席は床下にSAチャンパー方式を配した居住域空調を採用し、高効率かつ、静かでおだやかな鑑賞環境をつくります



・フライタワー高さの確保

高さ規制に対応して舞台レベルをGL-5mとすることで、プロセニウム高さ10m・オケピット上天井高さ14mを確保します

・殿堂であり小屋である内装

ホールの内装は、県産を中心とした木材を無垢(不燃処理等)でふんだんにつかうことで、格式とカジュアルさのバランスをめざします

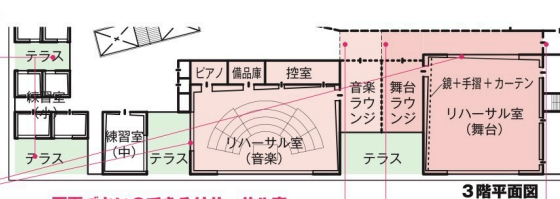
・演者と観客の近さ

サラウンド型の特徴であるステージ後方は、高さをオケピットの後列にできるだけ近づけ、合唱席としても利用する

■練習室エリアを使い倒す

・音楽テラス

各練習室にテラスを設け、休憩やソロパートの練習につかいます青葉山にさまざまな楽器の音がひびきます

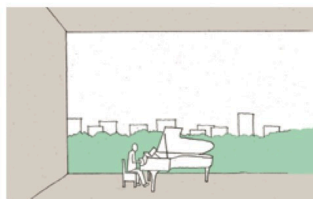


・楽団/劇団を身近に

各リハーサル室に設けた窓から練習風景をみるができます

・両面つかけのりハーサル室

セキュリティラインを複数設け、ウラからの専有利用とオモテからの一般利用の両方に対応します



・眺めの良い音楽リハーサル室

各リハーサル室・練習室には2重ガラスの窓を設置、景色を楽しみながら練習ができます

設計を進める上で特に留意すること——中心部震災メモリアル拠点

運営・企画と一緒に未来を育てる場をつくる

■じぶんの距離感で：様々な震災遺構・展示施設で、複数のガイドの人から聞いた「当時を思い出したくないと、訪れられない地元のひとも多い」という現実をふまえ、日常のすぐそばにありながら、それぞれのひとが自分のタイミングと距離感で向き合うことのできる居場所として、ランドスケープと一体となった震災メモリアル拠点をつくります

■「3.11 伝承ロード」へのゲート：太平洋沿岸500kmにも及ぶ被災地のほぼ中心にある仙台市の、さまざまなひとが訪れるエリアの複合施設にあるという地の利を生かし、各地に数多くある、被災の実情や教訓を学ぶための震災遺構・展示施設の入口として整備し、それぞれの施設の紹介や、展示が循環する仕組みをつくります

■数百年先へつなぐ：震災にまつわる展示物に「作者」はおらず、多くは写真や映像、漂流物といったそのものが語らない資料です。しかし、ガイドの方の口からそれらにまつわる話を聞いた瞬間、資料は生々しい体験そのものに姿を変え、わたしたちに迫ってきます。災害文化を伝承していくための展示は、他のあらゆる展示にもまして、見せ方や体験の仕方が重要です。震災から13年が過ぎ、海水浴も解禁されて日常が戻りつつある今、海や森の再生など新しい未来を考える時期にもきています。運営と企画と設計が一体となり、展示も施設もアップデートをし続けられる場所・仕組みづくりを追求します

①気軽に展示に触れられる交流連携スペース

屋外広場から通り抜けができる交流連携スペース沿いに、わすれん!の活動などと連携した、気軽に手にとれる展示を設置します



④災害文化を紡ぐ

各地のガイドのみならず、伝承のバトンをつなぐ「語り部」を育てるWSを行い、その成果を展示するなど、WSと展示を連携させていきます



②常に化する常設展示室

巨大な地形模型を設置し、プロジェクションマッピングやマグネットピンなどを用いて、日々内容を変化させます



⑤つくりながら展示する

市民工房を企画展示室に隣接させ、工房で製作している過程自体を展示します。β版を展示し、来館者の反応を見ながら更新します



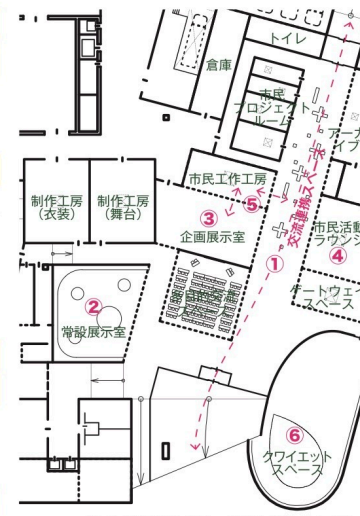
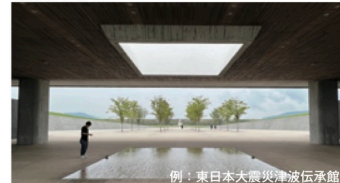
③3.11 伝承ロードのネットワークを育てる

リアス・アーク美術館の「東日本大震災の記録と津波の災害史」など、各地の展示を巡回させ、さまざまな被災の形をつたえます



⑥ランドスケープと一体となったメモリアル

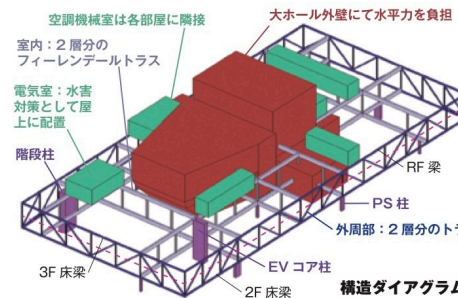
クワイエットルームは、誰でも訪れることができる。ランドスケープと一体となったしずかな場所とします



コスト縮減に関する提案・将来の大規模改修を想定した設計上の配慮

意匠と構造と設備が一体でつくる

構造計画：遮音性の高い大ホールの厚いRC壁が水平耐力を負担します。鉛直力は、2-3階の外周に2層分のトラスを回して支える柱を減らし、開放的な屋根付広場を実現します。不足分は、将来にわたる平面計画の自由度のため、同じく2層分のフィーレンディールトラスを採用、避難階段や設備と絡めた各種シャフトで支えます。トラスの斜材には制振ダンパーを用いて振動収束を早め、居住性を高めつつ耐震性能を強化します



設備計画：外周部・吹抜け・光庭をつかった自然採光/通風により、照明/空調負荷を低減しつつ、身体にやさしい環境をつくります。

個室や共用部などは個別空調方式で、使用エリア直近のテラス等に室外機や給排気口を計画し、冷媒管やダクト長を短くしてイニシャル・ランニングコストを削減、個別の保守や更新に配慮します。ホールや交流ロビーなどの大空間は、中央熱源方式による居住域空調とし、快適性と省エネルギー性を両立します。空調機械室は、ダクトルート最適化のため、主に屋上に出てくる各空間に接して分散配置し、機器交換のしやすい計画とします。屋上は、雨水利用、太陽光発電パネルの設置などに加え、将来の用途変更にも備えるスペースとします

